〔蜻蛉日記下ノ中〕れいのところにふみやる、さきぐのかへりごとゞも、みづからのとは見へざりければ、うらみなどして、

ゆふざれのねやのつまぐながむればてづからのみぞくもゝかきぬる、とあるを、いかゞおもひけん、しろひかみに、ものゝさきにして、かきたり、

くものかくいとぞあやしき風吹ばそらにみだるゝものとしるく、たちかへり、つゆにてもいのちかけたるくものいにあらきかぜをばたれかふかせん、といらへしかど、かへりごとなし、

〔古今和歌六帖六〕くも　ふんのあさやす

つねならぬ身はさゝがにの糸なれや天つ空なるたのみかくらん

〔重之集下〕又此君藤原寅近のもとにてくものてひとつおちたるが、二三日までうごくを、

さゝがにのくものはたてのうごく哉かぜを命におもふなるべし、

〔實方朝臣集〕七月七日ひきたりける糸に、くものすがきけるをみて、

さゝがにのもろてにいそぐ七夕のくもの衣はかぜやふくらん

〔赤染衞門集〕秋くものゐを、いみじくかきたるをみて、

我宿のあるじも今はなげくまじくものやへがきひくもなくみゆ

〔山家集上〕蜘のいかきたるをみて

さゝがにのくもでにかけて引くいとやけふ七夕にかさゝぎのはし

〔新撰字鏡虫〕蟾蜍上補奚反、齧牛虫也、今禽獸有虱也、下所乙反、志良爾、音幾、和蟻　几豈反、上志良爾、弥又支加佐、　自志良爾　蟪志良爾

〔倭名類聚抄十九蟲豸〕蟻虱カサヒラミ　說文云、蟻木佐々、　虱子也、虱所乙反、和名之良美、齧人虫也、

〔箋注倭名類聚抄八蟲名〕新撰字鏡、靈異記、訓釋同訓、新撰字鏡、又蚶蟪並同訓、按之良美者、之良牟之